南方熊楠全集

3

南方熊楠全集

3

平凡社

南方熊楠全集（全一〇巻）
第三巻　雑誌論考Ⅰ
定価　二八〇〇円
昭和四六年一一月二九日　初版発行

著者　南方熊楠
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
東京都千代田区四番町四番地
郵便番号　一〇二
電話　（二六五）〇四五一
振替　東京　二九六三九

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

© 岡本文枝 1971

0339-429030-7600

凡　例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、随筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集大成することを期した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方随筆』『続南方随筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものは収録する。
2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考の主要なものは原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。
3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。
4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録索引を付載する。
5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た→あった　名く→名づく　息ず→息まず　などのように）読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（怪→怪　耻→恥　咀→詛　など）。ただ、著者独特の書きぐせである用字、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「　」に対し小さい「　」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、ヂ→ジ　ヅ→ズ　などの書き改めは行なった。

六、書名および雑誌名には『　』、論文名には「　」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は‘　’論文名は“　”に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあって著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は〔　〕をもって示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、〔著者書きこみ〕と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文の末尾に注記を付した。

本書（第三巻）は、続刊の第四巻、第五巻とともに、諸雑誌に掲載された論考（英文論考を除く）を収録する。本書には『東洋学芸雑誌』以下二〇誌所載の論考を雑誌別に収録したが、すでに第一巻（十二支考）、第二巻（南方閑話・南方随筆・続南方随筆）に収録された論考は除外した。また『不二』の「平家蟹の話」や『現代』の「鳥を喰って王になった話」のように、同一テーマでより紙数の多いものが新聞に連載されたものは、第六巻に譲った。これらの点の詳細については、本全集最終巻の雑誌別掲載論文目録を参照されたい。

各雑誌の論考の配列は、原則として掲載巻号順によった。ただし、以下の諸点について若干の例外がある。

1. 独立の論考を初めに配列し、次に「寄書」「雑報」のような固定欄などに掲載された短篇をまとめて配置した。この場合、短篇の総括表題はなるべく原雑誌によった。ただし、『東洋学芸雑誌』の「質問」は、もとの欄名は「応問」であり、『郷土研究』の「小通信」は、「小通信」のほか「方言」「余白録」等の短篇をまとめたものである。なお、適当な総括表題が見当たらない場合は、便宜的に「小篇」を用いた。

2. 以前に発表された論考に対する補足・追加として書かれた短文は、【増補】【追記】等として、原論考に続いて収録し、その末尾に掲載雑誌名・巻号数を付記した。また、その短文に独自の題名がつけられている場合は、これをその冒頭に記した。

3. その他、『集古』で「なぞなぞ（謎々）」に関するものをまとめたり、『郷土研究』で「『郷土研究』の記者に与うる書」を末尾に配置したように、内容に即して配列を変更したものがある。

テキストは原則として著者手沢の初出雑誌を用い、著者の「書きこみ」をなるべく生かした。また、乾元社版『南

方熊楠全集』に収録されているものについては、これを参照した。この場合、たとえば『民族』の「椰子に関する旧伝一則」「シシ虫の迷信ならびに庚申の話」のように、雑賀貞次郎氏によって著者の「書きこみ」が整理されているものは、これを尊重し、〔増補〕〔追記〕等の記号を付して、挿入または付記した。

著者は、『続南方随筆』に続いて『続々南方随筆(仮題)』の準備を進めていた。これは完成・刊行の運びに至らなかったが、著者肉筆または雑賀貞次郎氏等筆写の草稿が残されており、その中には、本巻収録の論考を増補・改訂したものも含まれている。この場合は「続々南方随筆稿」をテキストとし、初出雑誌と対校して、明らかに筆写のさいの誤記と思われるものを正すにとどめた。文中の〔増補〕、篇末に括弧内に執筆年月日を付記した【増補】【追記】等の文章が増補された部分である。最後に、「続々南方随筆稿」をテキストとした論考を、掲載順に列記する。

《東洋学芸雑誌》「ペストと鼠の関係」「人名を氏の義に連ねて命ずること」
《早稲田文学》「『大日本時代史』に載する古話三則」
《人類学雑誌》「涅歯について」「一枚歯——歯が生えた産れ児」「無言貿易」「魔除に赤色を用ゆ」「白馬節会について」「スペリカンスという遊戯」「月見の祝儀」
《動物学雑誌》「マンモスに関する旧説」
《郷土研究》「白米城の話」「針売りのこと」「頭白上人縁起」「赤山明神のこと」
《風俗》「ミイラについて」
《土俗と伝説》「熊野と榎」
《集古》「なぞなぞの小唄」「軍配団扇の現われた時代について」「装飾として持つ杖」
《民族と歴史》「南紀特有の人名」「トーテムと命名」
《土の鈴》「三角の銀杏」
《現代》「桑名徳蔵と橋杭岩の話」
《同人》「真田が謡について」

目次

凡例

東洋学芸雑誌

オリーヴ樹の漢名……5

ダイダラホウシの足跡……9

寄書……13

ペストと鼠の関係13　「桜の記」14　動物の保護形色14　言葉のかずかず15　幽霊に足なしという
こと17　人名を氏の義に連ねて命ずること21　飛行機の創製22　「鼠の嫁入り」の話について26

質問……29

ホトトギスについて29　本邦産淡水生紅藻について30　再び本邦産淡水生紅藻について31　梅に
ついて32　芸州吉田川の食用藻について33　油木について、並びにトネリコについて34　葉なき
蘚について36　カシノキ数種について37　熊野産顕花植物および羊歯数種について37

早稲田文学

『大日本時代史』に載する古話三則……41

人類学雑誌

涅歯について……59

一枚歯――歯が生えた産れ児……67

無言貿易……76

雑　報……79
邪視のこと79　人名を呼んで児啼きを止むること80　馬頭神について81　誕生日に小児の生い立ちをトうこと83　仏経に見えたる古話二則84　魔除に赤色を用ゆ85　白馬節会について86　スペリカンスという遊戯88　月見の祝儀90

動物学雑誌

マンモスに関する旧説……93

太　陽

猫一疋の力に憑って大富となりし人の話……97
支那民族北方より南下せること……110
戦争に使われた動物……114

人　性

常世国について……159

郷土研究

白米城の話……165
針売りのこと……169
橋の下の菖蒲……174
栗鼠の怪……177
陸奥女人の話……181

わが子を生まんがために他子を養うこと……185
孕婦の屍より胎児を引き離すこと……188
小篇……191
山人の衣服について191　羊の語源について192　頭白上人縁起193　山オコゼのこと194　赤山明神のこと195　シュンデコ節196　虱が人を殺した話197　ハマボウとハマゴウ198　秘しおった年齢を自分で露出した話200　蜘蛛を闘わすこと202　辻占果子202　蛙を神に供うること203　蓮燈204
紙上問答……207
質問207　応答212
小通信……234
川成と飛驒工の技を競べし話234　鬼子母神が柘榴を持つ235　鰌取り235　美人を出す地236　五郎四郎柴236　井鹿237　水量をもって年の豊倹を占うこと237　衣類を算える童戯238　若狭の人魚239　つるべおろし239　切飯の風習240　柱の穴240　家の怪240　みおろし241　歯のまじない241　レンコという遊戯242　杉樹酒泉のこと242　庭木が家より高く伸びること243　昔千軒あったという村243　モミナイという言葉244　ヌシという語246　山口君の「動物に関する壱岐の俗信」の一、二条246
『郷土研究』の記者に与うる書……248
不二
陰毛を禁厭に用うる話……257
蟹の卜占……263
月下氷人……268

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

虎に関する笑話……307
風　俗
ミイラについて……315
雑　報……323
かんぼく 323　王粛の逐鼠丸 323　質問 324
土俗と伝説
南方随筆……327
棄老伝説について 327　インドの賤民 328　熊野と榎 328　牛に引かれて善光寺詣り 329　獅子舞いの起り 330　あやかし 330　幣束から旗さし物へ 331　山鳥 332　鳴かぬ蛙 332　刀豆 334　富士講の話 334　赤山明神 335　片葉の蘆 335　第六天 336
考古学雑誌
烏帽子の諸部の名称について……339
衣服をキモノと呼ぶこと……340
飛驒史壇
スノリについて……343
小　篇……347
質問二則 347　金森氏で賤ヶ岳に働きし勇士 348　飛驒の踊 349

集古

なぞなぞ……351
謎々余言……382
古来伝習男女間大和言葉……385
なぞなぞの小唄……391
軍配団扇……396
軍配団扇の現われた時代について……398
墓碑の上部に烏八臼と鐫ること……404
鎖鎌について……422
毘沙門の名号について……424
再び毘沙門について……425
小篇……429
団扇の話につきて429　蛇に食いつかれぬ歌430　朝鮮の公孫樹432　徒歩運動について432　装飾として持つ杖433　徒歩運動古く日本にありしこと435　数え唄について436　手車の唱え辞437　南方姓の訓み方について437　勢力という悪業者438

民族と歴史

南紀特有の人名……439
トーテムと命名……445

出産と蟹……461
民族短信民俗談片……465
スッパとカニサガシ465　俘虜と賤民467　垣内468　岡西惟中の歿年469　藤白王子社畔の大楠470　件470　おばけ471
土の鈴
笹野才蔵の博多人形について……473
三角の銀杏……477
柱松について……481
春駒の名義……485
セノ木について……488
資料短信……490
紀州の瓦猿について490　蚯蚓幟490　『絵本満都鑑』の第十一図491　婚礼と餳491　陰陽石崇拝492　いびつ餅493　琉球の鬼餅493　田祭りの餅について494　縄掛地蔵494　蒟蒻問答について495　潮吹きの挽臼について496
性之研究
孕石のこと……497
東洋の古書に見えたキッス……507
鮮人の男色……511

若衆の名義起因――僧同士の非道行犯……513
現代
桑名徳蔵と橋杭岩の話……521
同人
西施乳について……547
牡丹を夏の花とするについて……550
真田が謡について……552
小篇……555
春蟬について 555　サネキという木 556
日本土俗資料
餅を福と称うること……557
民族
ひだる神……567
フクラシバ……572
椰子に関する旧伝一則……573
シシ虫の迷信ならびに庚申の話……582
水乞鳥のこと……598

蜀黍について……600
紀州田辺より……602
杖の成長した話 602　衣を隠された神女 604　ミソサザイは鷹の一属 604　虎杖をゴンパチということ 605　人を土地に執着せしむる水 606
南方の学問的系譜と民族学……大林太良……607

南方熊楠全集　第三卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com